

云、錦書ナルベシ、其美未曾有也、近年是ヲ専用セシガ、三五年來數彩ハ稍廢レ、藍或ハ金銀畫行ル、此他舶來ノ物ヲモ用フ、舶來ノ物等ハ、内外ゴスノ藍繪アリ、再燒ノ物ニ非ズ、

〔後撰夷曲集八〕題々らす雜

滿永

菊盆に槿のちよく桔梗皿みな花やかな道具ども哉

〔扶桑名處名物集伊勢〕桑名

梅香園

蠶かふ桑名の宿の泊り客猪口に糸ひく酒をこふらん

〔倭訓栞中編八〕こつふ 酒盞の類にいふ蠻語也、或は骨杯と書り、又まづふともいふ、金叵羅をよ

めり、或は琖をよめり、遵生八牋の高脚勸杯是也、

〔和漢三才圖會三十一〕觴中

觚小者稱古都布名酒冷飲用之、

〔雍州府志七〕賀留多 六條坊門製之、中元阿蘭陀人玩之、長崎港土人效之爲戲、凡賀留多有

四種紋、中一種紋謂古津不、蠻國酒盃謂古津不、是表酒盃者也、

〔料理通四編〕普茶卓子略式心得

一こつふ、酒鍾は銘々ひかへあれど、酒たけなはにおよびて、各たがひに盃をとりかへて、飲事なり、

〔臨時客應接〕主人相伴にて獻つ酬つ、酒宴にならば、外の盃猪口、滑杯らうひなどを出し、中下

〔酒史新編上〕酒器

昇平既久、玩好日盛、而酒器最多、高野惟馨造、罽醜杯、玉山是尤好奇者也、中攝津商家一大杯畫七

猩々鼓樂醉舞之狀、容六升五合、杯臍容一升、攝津名所圖會是尤大者也、嵐山以櫻花聞天下、而土人以櫻樹

造杯、墨水以都鳥聞天下、而土人造陶盃、畫都鳥、是皆以勝槩得名者也、其他駿河竹絲杯、陸奥埋木杯、

雜盃

こつふ